

特集Ⅱ

アガリクスを必要とする消費者多く

特集・アガリクス 市場回復の兆し

需要が高まりつつある原料市場

「発がんプロモーション促進作用」報道以来、アガリクス市場は大きく落ち込んだが、関連各社の努力により、市場は回復の兆しを見せている。さらに、今年に入ってからの追い風となる研究成果の発表が続き、厚生労働省研究班によるアガリクスの臨床試験がスタートすることも発表された。

「市場は回復基調」

アガリクスは、免疫賦活の代表的健康食品として350億円という大規模市場を形成したが、06年2月の厚生労働省による「キリンウェルブス社製アガリクスの発がんプロモーション促進作用」報道以来、市場が大きく落ち込んだことは周知の事実。現在の市場規模は、100億円前後と推測される。もちろん、この報道だけではなく、04年の劇症肝炎、05年の史輝出版のバイブル商法摘発も伏線になっている。

この報道後、まもなく関連企業が集まり、半年後には「アガリクス・ブラゼイ協議会」を発足させた。統一した基準をつくり、安全性を確保すること、このようなことを起こさないことが目的である。

その後、協議会として安全性の自主基準を策定し、安全性を訴えることで

で、市場に活気が戻りつつある。なお、厚生労働省によるキリンウェルブス社製アガリクスの安全性試験の結果は、11月30日現在、まだ出ていない。

今年春あたりから、原料が動き始めたという原料メーカーの声が多く聞かれるようになった。また、通信販売や配薬業者などの無店舗販売は回復

7月には、日本補完代替医療学会シンポジウムにおいて、NCI(米国国立がん研究所)のラビッドプログラムで、協

これらの研究成果がアガリクスの信頼回復の大きな追い風となっており、市場回復の後押しになるだろう。



アガリクス・ブラゼイ 本当の話

の活動やアガリクスのヒト臨床試験の結果が論文になるなど研究が進んでおり、安心できるものだということが伝わる内容になっている。

※冊子は無料

アガリクス・ブラゼイ協議会事務局
〒105-0004
東京都港区新橋1-8
3 住友新橋ビル7F

「追い風となる研究発表」

アガリクスの安全性、有効性のエビデンスは、今年に入って有力な研究発表が続いており、大きな追い風になるものと思われる。

今年4月には、東京新薬のアガリクスのヒト臨床試験による安全性・有効性の論文が、英オックスフォード大学出版局の「e-CAM」誌に掲載された。

金沢大学大学院の大野智特任准教授が、厚生労働省研究班としてのアガリクスによるがん臨床試験を始めることを発表された。

厚生労働省研究班・アガリクス臨床試験

金沢大学大学院医学系研究科 臨床研究開発 補完代替医療学講座 大野智特任准教授に聞く

先月開催された日本補完代替医療学会学術集会において、金沢大学大学院大野特任准教授は、厚生労働省研究班としてアガリクス・ブラゼイの安全性を評価するための臨床試験を開始すると発表し、概要を説明した。今回は、この試験を実施する大野准教授に、試験の方法・内容や代替医療・健康食品をどう考えているかなど話を聞いた。

厚生労働省研究班としてのアガリクスの臨床試験について教えてください。

大野 今回の研究は、厚生労働省がん研究助成金による「がんの代替療法に関する科学的検証と臨床応用に関する研究(主任研究者、住吉義光・四国がんセンター第一病棟部長)」の一環として行われま

試験方法は、20〜80歳のがん治療後経過観察中の患者90名を1日1.8g、3.6g、5.4gずつ摂取する、男女各15名の計30名の3グループに分け、摂取期間を2週とします。そして、試験開始から2ヶ月ごとに、肝臓、腎臓への副作用やQOL(生活の質)や免疫

機能などへの影響を調べます。補完代替医療学会で「有効か無効か、有害か無害かを臨床試験で明らかにし、適切な情報発信をしていきたい」とおっしゃっていました。が、「有効か無効か」は有効性、「有害か無害か」は安全性の確認ということになります。

大野 「有効か無効か」は有効性、「有害か無害か」は安全性の確認といたことで結構です。しかし、今回の臨床試験では、転移・再発への影響は直接は検討いたしません。主評価項目は安全性

で、副次的評価項目がQOL、免疫機能への影響、摂取コンプライアンスになります。

大野 我が国のがん患者の補完代替医療の実態調査では、利用頻度が高い素材であることがわかってはいますが、製品としては種類が多く玉石混濁といった印象を受けます。安全性や有効性については、臨床試験で確認された結果で判定したいと考えていますので、現時点では、有効無効、有害

無害については、先入観を持たず、中立的な立場で捉えています。

大野 個人的な意見ですが、わが国の医療システム全体の問題点として補完代替医療の将来的なあり方を考えると、患者にとりて医療が西洋医学・補完代替医療または通常医療・非常常医療などと相対していることは、ある意味患者にとって不幸であり、それを許容することは医学の怠慢とも考えられます。今後、補完代替医療が持っている包括的・全人的な患者ケアの視点をふまえ、どこまで医療としてカバーすべきなのか、医療従事者だけでなく、国民全体が考えるべき問題点と思われる